

# 英吉利 Naturism の系譜\*

出口 泰 生\*\*

ウィルヤム・クーパーの詩句、「神は田園を造り、人が町を造った<sup>(1)</sup>」というの、余りにも有名であるが、しかし今日、イギリスの自然にふれてみると、「人が田園も、町も造った」といった方が、実感としてはぴったりとする。すなわちこの国では、いたるところの自然に、人間の文化を見出すことができるのである。たとえばあのドーバーの岸辺に立って打ち寄せた波の音をきいていると、シェイクスピアの、「聞こえるか、あの海の音が<sup>(2)</sup>」ひびいてくる。この国の文化や伝統を考え、あるいはこの国の人間の思想の変遷をふり返ってみるとき、決してこの自然を離れては考えられない。

とくにこの国の近代化が、ルネサンス時代にその礎えがなされ、その近代化の過程において、何が重要な要因であったかを考えると、個人の自覚にしる、科学の発達にせよ、あるいは社会構造の変革にせよ、そのいずれをも、自然と密接につながっていることを見逃すわけにはいかない。

英国の自然は、その冬の暗鬱さと夏の美しさとは、まことにあざやかな対照を示している。このことは、吉田健一氏の指摘されるように人生の歓喜を識るためには、その苦汁をも味わわねばならぬ<sup>(3)</sup>、という真実にも似ている。英国の夏は美しい。その自然の美しさは、長い冬の憂鬱のためにこそ、一層際立ったものになっている。冬の暗鬱さに耐えたものだけが、それとは反対の明るい、夏の喜びを知ることができるのである。

こうした相反する自然の様態は、対照の極めて鮮かな明暗、善悪、肯定と否定といった、二元的な価値観に結びつくのである。自然が人間のものとなったのは、近世のルネサンス以後のことであるけれども、しかし価値のこのような二元性、とくに天国と地獄、神と悪魔、肉体と精神といった反定立の意識は、実は中世から受け継いだものであった。

だが中世においては、自然はいわば人間にとって禁断の実にも等しかったのである。ご承知のように中世の禁欲主義は、自然に対しても人間の目を閉じさせたのであり、想像力を自然から奪ったのである。

ルネサンスは、人間の発見であると同時に、自然の発見の歴史でもあった。すなわち自然の発見から人間の発見しヒューマニズムの基礎をひらいたといえることができるのである。「それは過去から解放された人間性の偉大な記念碑のうちに顕現され、人間と自然の美をはっき

\* The Genealogy of English Naturism

\*\* Yasuo Deguchi

りと認めることを意味した」のである。<sup>(4)</sup>中世の禁欲主義を打破する近世の人間の発見は、ま  
ず人生の享樂、いかに人生をエンジョイするか、という命題であったと思う。即ちこれは、  
そのまま自然を享受する思想につながるのである。

自然を人間化したのは、古代ギリシア人であった。月をシンシアにたとえ、あるいは黄水  
仙にナルシスを見出し、森のなかに妖精たちを発見したのは、ギリシア神話であった。この  
ような思想は、同じように古代ローマにも受け継がれたのであるが、こうした異教主義は、  
中世では無残にも、打ちくだかれたのである。だがルネサンスの新しい流れは、この古いイ  
メージに、新しい生命を与えたのである。Naturism（自然崇拜）の思想は、こうした古代  
文明を媒介として、近世にもたらされたのであった。

ルネサンスの一般的傾向としての、田園生活に対する憧れは、ギリシア・ローマの古典文  
学の影響も見逃すことはできない。それはバージルの『エクローグ』であり、オビッドの『レ  
メディオナム・アモリス』であった。ホラティウスのエピキュリアニズムも、時代の風潮と  
して、大いに尊ばれたことも見逃すことはできない。

シェイクスピアが、自然のイメージをいかに重く見たかは、キャロライン・スパージャン  
女史の科学的、<sup>(6)</sup>実証的研究をみれば明らかである。シェイクスピアの自然は、むしろそれは  
イギリスの自然である。ギリシア・ローマの古典文学の影響は、彼の場合は、二次的のもの  
であったかも知れない。だが明らかかなことは、シェイクスピアは、自然のあるがままを、も  
っとも積極的に描象した天才であった。

Comming to kiss her lips.

Me seemed I smelt a gardin of sweet flowers.

The dainty odours from them threw around,

For damzels fit to decke their lovers bowers.

Her lips did smell lyke unto gilly flowers:

Her ruddy cheeks, lyke unto roses red;

Her snowy browes, lyke budded bellamoures;

Her lovely eyes, lyke pinks but newly spred:

Her goodly bosome, lyke a strawberry bed:

Her neck, lyke to a bounch of cullanbynes;

Her brest lyke lilyes, ere theyr leaves be shed,

Her nipples, lyke young blosomd jessemyners

Such fragrant flowers doe give most odorous smelt,

But ber sweet odour did them all excell.

(Amoretti, LXIV)

シェイクスピアの自然観は、やはり二元論にもとづいている。このソネットのような自然

イメージの美しさは、いわばイギリスの夏のそれであり、それ自身が善である。これに対して悲劇のモチーフとなる嵐や暗闇のイメージは、冬のそれであり、それ自身が悪である。それらは殺人や死や悪心や、あるいは恐怖や悪魔や、また不安と凶兆やを象徴したのである。

『ハムレット』においては、暗黒と嵐と亡霊が、主人公を悲劇のなかにひきづり込むのだし、『マクベス』の王位と勇氣は、つねに嵐によってゆすぶられる。『リア王』では、嵐のイメージは重要な主題であり、リアの悲劇は、嵐とともに展開する。自然は善も悪も、あますところなく写す鏡であり、そこに写る姿をあるがままに捉えて、描き出したのである。

イギリスの自然をみると、男性的な風光と女性的なものが、きわめて調和的に共存している。樺とかエルムなどの大木が、亭々として大空に聳えて林立するそのかわらに薔薇や堇れ花が、こぼれるように咲き乱れている。この二つのものの対照は、決して調和を破ることはない。力強い精神的な逞しさと繊細な感覚とが、溶け合っている。シェイクスピア文学の本質も、このような自然の調和であると思う。

ターナーはイギリス絵画史のなかで、もっとも傑出した画家であると言われているが、彼の大胆な筆致と、またその反面、実に繊細な色彩の変化を見ると、彼はもっともイギリスの自然に順応した作家ではなかったかと思う。むろん彼の数多くの佳作がなされたのは、イタリアの風光に接してからであった。かれが変容つきることのない大自然、流転する空と海、<sup>(6)</sup> 成育する樹木の様相を描いて、そこに投影する「すさまじい光の威力」を発見するまでには、彼の師のコーゼンスや、さらにベニスやスイスの強烈な光に、ふれなければならなかった。

イギリスの自然の美の創造者たちが、地中海の文明や風光に接して、その才能を発揮したのは、かならずしもターナーのみではなかった。この地に遊んだバイロン、シュリーは云うに及ばず、キイツあるいはコオルリッジにさえ「地中海の海の蒼さ」は、深い感銘を与えたのであったし、エリザ朝の詩人たち、あるいはずっと溯って、スペンサーやチヨサーにも地中海文明と風光とを見出すことができるのである。であるからこれらの創造者たちが、なしたところの自然の美の探求には、様々の影響がぶつかり合っていることは、言うまでもない。むろんこの国には、北歐的な力強い血脈の他に、ケルト民族の繊細な個性が、混け合っていることも事実としていなめない。

イギリス人は相反する性格を内在する。冷酷さと親しみ、暗さと明るさ、神秘性と合理性、これらの相対する二面性は、はじめに触れたように、この国の自然に根ざしているといっても、決して過言にはなるまい。長い暗鬱な冬と、美しい夏の日との対照は、相反する二つの性格を、かたちづくるのに十分である。一は他によって、さらに特徴づけられ、そのかたちを為すのである。そのどちらか一方でも欠くことは、この国の自然とは言えない。ターナーの絵にある荒々しい海の波、そこに投ずるやさしい日の光、あるいは壮麗なる樹木とやさしい花々とのコントラスト。したがってこうした二面性が、彼らの性格に作用を及ぼしたものであれば、そのどちらの特徴を欠いても、真の人間性は得がたいのである。

中世からのストイシズムの伝統は、イギリス人を強健にしてきた。それは人間的な欲望の

否定という形を借りてはいるが、同時に人生の肯定的価値を享受するだけの能力を、十分に養い得るものであった。『ベオウルフ』のあの古譚の、太陽のない原野と、氷の海と、嵐の暗さと冷酷さは、アングロサクソンの、原始的な暗い血統を象徴するものであり、中世と禁欲主義と結びついて、イギリス人の性格を、決定づけたのである。

だがエピキュリアニズムは近世からの所産物である。すくなくとも英国においては、ルネサンス以降にもたらされた思想である。イギリス人が真の夏の美しさに目を開いたのは、ルネサンスのエピキュリアニズムによるものであった。ルネサンスには、人生を享樂するという問題がおこったのである。しかしこの人生の享樂は、冬の長いストイックな禁欲のあとでは、あたかもせきを切った欲望のように、はげしく強烈なものとなるのである。

イギリスの自然の明暗は、かようにその対照が極端にかけ離れているのであるが、このことは人間性についても言い得るのである。苦痛と同時に喜悅を味わうことの出来る人間は、余程力づよい人間性の持ち主でなければならぬ。

英国の近代化は、いうなれば自然の形而上学的発見と、形而下的な利用とともに、進展してきた。そしてこの両者は、あたかも車輪の、主軸と輪のように、一体となってその働きをなしとげてきたのである。シェイクスピアの Naturism の傾向は、あきらかに彼の時代の流れを示すものであり、彼はその時代の傾向をもっとも如実に表現したのであった。エリザ朝からジャコピアン朝に至る、同時代のひとびとの自然観は、大凡このようなものであった。

Weep you no more, sad fountains:—

What need you flow so fast?

Look how the snowy mountains

Heaven's sun doth gently waste!

But my Sun's heavenly eyes

View not your weeping,

That now lies sleeping

Softly, now softly lies,

Sleeping.

この美しい叙情詩のよみ人は解らない。またさほど教養高い人士ではなさそうである。ただシェイクスピアの同時代の隣人であったことは確かである。この時代以前には、とうてい想像も難いような、自然のイメージが描き出されるようになったのである。そして人間としては、自然のままの人間が、理想視されたのである。これはまた何もイギリスだけの問題ではなく、ルネサンスのヨーロッパの諸国では、どこでも理想とされた像なのであった。自然は善でも悪でもない、ましてや人間は不完全な存在である。その不完全さを、自然のまま、あるがままに捉えるのが、人間の真実に迫ることである。

ルネサンスから、ロマン主義のリバイバルまでには約二百年の歳月が経過している。この間、風俗や習慣のみでなく、産業や社会制度も、めまぐるしく変化したのは言うまでもない。知識もまた進歩したと言わねばならない。なかんずく科学の進歩は、形而下のものばかりでなく、形而上学にも変化を及ぼしたのである。イギリスの近代科学の創始者、フランシスベーコンは神の存在は否定はしなかったが、自然のなかに神の内在することを自然を人間のために利用すべきだという、彼の素晴らしい着想は、ロックをはじめ多くの共鳴者を得たのである。

英国に当時移入された樹木は、この国の田園自然に新しい美観をそえるものであったが、これとても実を言うと、功利的な目的によるものが多かった。今日「樹木の王」という名で親しまれる、あの尊厳のある榲の木は、それは家具のためであり、チェリーはその花を賞でるのではなく、その実をとるために移入されたのであった。

イギリスの功利主義思想は、ロックやヒュームが出るに及んで完成した。十八世紀の啓蒙主義の時代に、このような思想は完成したのであるが、他方ルネサンスとロマン主義の合間に介在するこの時代は、周知のごとく詩よりはむしろ散文の時代であったし、自然や田園生活に対する評価、むしろ忘れられようとしていた。だがこの時代を、先の時代よりも後退したかのように考えるのは、当を得ていないように思う。この時代の人間の理想は、一種の文化生活であって、その価値の評価を、古典的の尺度に求めたのである。知識は言うまでもなく進歩していたのであり、都市文明は比較にならぬほど洗練されるようになっていた。

ローマン主義復興は、ルネサンスの落し子であるが、自然に結びつく Naturism の思想は、ルネサンス以上であったかもしれない。その一つの理由としては、むろん J・ルソーによる、自然思想の影響の大なることは否定できないが、それにもましてこの時代に対する危機感が、一層自然にむけたのではないかと思う。すくなくとも彼らの自然への態度は意識的であった。

ルネサンスの英国と、十九世紀初期の英国とでは余程の差違がある。ロンドン为例にとっても、チャリングクロスには、まだ見るべき家並もない。市街はロンドン塔の周辺に片寄っている。ところが十九世紀のロンドンは、西北に拡がり、工場地帯や、新しい住宅街がどんどんと建設されている。

To one who has been long in city pent,  
'Tis very sweet to look into the fair  
And open face of heaven,—to breathe a prayer  
Full in the smile of the blue firmament.

(7)  
この詩句には、すでに都市生活に疲れた近代人の、自然に対する憧憬がみえる。おそらくこれより二百年前の詩人には、こうした詩は、予兆できなかつたに違いない。この時代の知

識人たちの危機感は、おそらくこの時代前では、やはり考えられないことであった。すなわちマス・メディアとくに印刷図書と、新聞の発達には目覚ましいものがあったのである。

あるインテリゲンチヤの家庭では、家庭においても、毎朝新聞を読んで、政治記事に目を通すほどに政治的意識も進んでいたのである。したがって、大陸からのナポレオンの侵入に対する危機感とか、この国の政治や経済に対する不満はかなり深刻に拡大していたようである。父親は十八娘にさえ日々の新聞記事に気をつけるようにと教育している。言うまでもなく一般的な知識の水準は、はるかに向上したのであった。

さて私はこの稿のおわりに、ローマン派と目されるひとたちの自然観にふれてみたい。ワーズワスはいうまでもなく、この派の中で自然詩人と呼ばれるのに、もっとも妥当なひとである。おそらく自然のなかに、このひとほど形而上学を発見した詩人は、このひとの前にも、後にも見出せないのではないか。あるいはその自然の喜悅は、ブルックが、「この世界でかつて書かれたもののうちの、もっとも素晴らしい表現<sup>(9)</sup>」であるという次の詩をみよう。

It was an April morning: fresh & clear  
The Rivulet, delighting in its strength,  
Ran with a young man's speed; and yet the voice  
Of waters which the winter had supplied  
Was soften down into a vernal tone.  
The spirit of enjoyment and desire,  
And hopes and wishes, from all living things  
Went circling, like a multitude of sounds.  
The budding groves seemed eager to urge on  
The steps of June.

この章句は、かなり長いので割愛するが、ワーズワスの自然は、至福に満ちあふれている。春にはもの皆が悦楽にみち、夏にはその喜悅にひたり、秋には実りと収穫をよろこび、冬は冬で来たるべき春の種子を秘める、といった永遠の至福に満ちているのである。嵐や天変地異でさえ、この詩人には単なる死や破壊とはならず、生命を新しいかたちにするものと映ずる。だがこのようにしてみると、ワーズワスの態度は、エリザ朝の詩人のそれに比べると、やや観念的すぎるきらいがある。むしろワーズワスが、現実の人間の真実に目をむけることを避けたが、ためでないことは自明である。むしろこの詩人はその受ける印象とは逆に、人間くさいのである。それにはこの詩人のフランス革命に刺激されたころの、血の気の多かった青年期を想起すれば足りるであろう。

しかしワーズワスの自然思想は、自然は根源的には善であるという信仰に根ざしていることは自明であるが、大事なことは、ブラドレー<sup>(11)</sup>の指摘するように、この詩人の楽観主義は、決して悪を無視することではなく、悪の事実そのものに基礎をおいている点である。結論的

に言えば、ワーズワスにとって、自然とは人間にとって、神の顕現に他ならない。だがワーズワスには、全体としてみるならば、自然における葛藤を描くときには、何か迫力が乏しいという感をもまぬがれない。これは要するに、彼自身があのきわめて美しい、英国の湖畔地方に生まれ、もっともセンシティブな時代を、その美しい自然の至福につつまれた日々を、過ごしたことに、一つの理由があるのではないだろうか。彼は都会の生活者よりは、むしろ生来「田園人」であったのである。

この派の詩人たちのなかで、J・キイツの Naturism は、あるいはルネサンス以上のものであったかもしれない。はじめキイツは、エリザ朝の詩人たち、なかんずくシェイクスピア、ポーモント、フレッチャー、チャタートン、少しさかのぼっては、E・スペンサーなどの影響から、「自然」に開眼したのであったが、彼がギリシア古典の世界を発見してからは、彼の先人たちよりは、エピキュリアンとして、一層その面目を発揮している。彼は同時代のワーズワスのように、靈的存在を認めるのではないが、自然をもっと人間的のものにしたのである。だからワーズワスを自然詩人と呼ぶような意味では、キイツはその名に値しない。かれはギリシア神話の創造者たちと同じように、月を女神シンシアとし、樹の間に妖精たちの姿を見、草花を擬人化する。ワーズワスほどの精神の崇高さには達しなかったにせよ、彼の想像力と感性によって捉えられた自然のすがたは、やはりこの時代の、歴史的な役割にかなうものであったにちがいない。マリーは<sup>(12)</sup>この点で、キイツをシェイクスピアに次ぐ天才と目したのであった。

産業革命が進行し、イギリスの工業化は急速にひろがって、田舎住いのジョン・ブルがいつの間にか大実業家に早変わりし、日に月に巨大な富を蓄えていった。しかし一方では、新しい社会のなかで立身出世をねがう功利主義的風潮や、物質万能的な傾向が、個人の間らしい生活を圧迫し、ようやく内面的の危機は、萌芽しはじめていたのであった。であるから、この時代の、新しいエネルギーを正しく指向するところの、新しい理想をとらえる責務は、この時代の詩人たちに課せられていたのであり、キイツにせよ、シエリーにせよ、その役割は十分にはたした国民詩人であったということもできようか。

イギリスの自然にふれると、その樹木の枝ぶりや、その樹下の草花、あるいは淡い陽ざし、湖の岸辺、農家の軒下にさえも、何か神秘的なものを感ずるのである。英国の自然詩のなかに見られる。神秘的な要素は、明らかにその自然の影響を受けているという事実は否定できないであろう。それは今日においてもなお変わらない。

だが今世紀の思潮は、まず十九世紀ローマン主義神秘思想の克服ないしは否定のテーマが打ち出されたのであったが、ロレンスの文学は、むしろイギリスの自然に根ざす点の、余りにも大きい事実はいなめない。いなイマジズム詩をたてまえとしたジョイスでさえ、彼の詩の本質はローマン的、さらにいうなればルネサンス的である。

ロレンスは自然に関しては原始主義である。それは自我の崩壊をむかえた、今世紀の人間が、人間性の回復をのぞむ、ルネサンス以来のヒューマニズムに、立ちかえろうとする志向

性に他ならない。だがロレンスが、ワーズワスのごとく、自然のなかに靈的な存在を確認したりはしない。それはもっと人間的であり現実的である。このことはロレンスの詩をみると一層明白になってくる。彼の詩のイメージには、「太陽」や「月」や「雲」や「草木花」などで抽象されるものが多いのだが、「暗さ」のイメージが、支配していることを見逃さない。つまり「光」と「影」は、対照的にロレンスの詩のイメージとなって全体にひろがってくる。また自然と人間とは、一層対照的に描かれる。「光」は自然であり、「暗さ」は人間に他ならない。だが人間は、自然と交わり「光」を得ることができる。ここにこの詩人のエククイブリアムがあったのである。彼はワーズワスのなし得なかった道、つまり性を赤裸にすることによって、自然の至福にたどりついたのである。

イギリスの精神が、哲学的思想よりはむしろ詩作品のなかに多くのべられているという確信は、多くの批評家、学者の指摘する点である。またイギリス文化の特性をみると、だれしも、その近代の社会制度、政治と経済と近代工業に、イギリスが天才を示したことに異論はないが、このように実際の国民がまた他方において偉大な想像力をもって、秀れた詩作品を生み出し、しかもかれらは「自然に関する」諸学に偉大な<sup>(13)</sup>貢献をしてきたことも確かなのである。あるものは、自然の功利的な利用、科学的な克服を考えたが、しかし他方においては、自然によって、人間性に目覚め、それがこの国の文化の母体になってきたといっても過言ではない。

〔注〕

- (1) William Cowper: The Task
- (2) W. Shakespeare: King ear. ActⅣ
- (3) K. Yoshida: Eikoku no bungaku
- (4) J. A. Symons: Renaissance
- (5) Caroline Spurgeon: Shakespeare's Imagery
- (6) Laurence Binnyon: Art & Landscape in English Literature
- (7) John Keats: Sonnet
- (8) E. M. Forster: Marian Thornton
- (9) A. S. Brook: Naturalism in English Literature
- (10) W. Wordsworth: The Excursion II.
- (11) A. C. Bradley: Poetry for Poetry Sake
- (12) I. M. Murry: Keats and Shakespeare
- (13) A. C. Bradley: ibid.